

令和6年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：旭川地区
- 2 事例報告学校名：旭川市立近文小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 青山 天生
- 4 キーワード：学びの機会の保障、授業改革、社会とつながる体験活動

1 はじめに

本校は、旭川市の北西部、悠々と流れる石狩川の辺りに位置している。自然林が今なお色濃く残る嵐山公園を背にし、遠く大雪の峰々を望む。春にはコブシやカタクリの花々が咲き誇り、自然に恵まれた教育環境にある。「近文」という地名は、アイヌ語の「チカプニ（鷹のたくさんいる所）」が音訳されたものであり、隣町の「鷹栖」は意識されたものである。



今年度、旭川市は市制施行102年目を迎えた。本校も開校102年目を迎え、同じ時を歩みながら、9,000人を超える卒業生を輩出してきた。近文における人づくりが旭川市のまちづくりに貢献してきたとする地域の誇りは高く、地域創生の礎となる本校教育への期待は極めて大きい。校区には、市内唯一の商業施設があり、高速道路のインターチェンジに近いことから、市内外の人の往来が活発な地域である。現在、児童数377人、学級数18（内特別支援学級6）であり、今後は児童数及び学級数の漸減が見込まれている状況である。

2 学校経営ビジョン(概要)

- ◇学校教育目標 「夢を描き 未来を拓く 子ども～みんなのウェルビーイングの実現へ～」
- ◇重点教育目標 「自ら学び 他者と協働する 子どもの育成」
- ◇経営の重点
 - 1 子ども一人一人にふさわしい学びの場の設定
 - 2 授業改革の推進と学級経営の充実
 - 3 学校課題の適切な把握と迅速な対応
 - 4 心理的な安全を確保し、切磋琢磨する教職員集団づくり

4月、学校経営ビジョンについて次のような説明をした。「未来からの挑戦状と近文小の教育が乖離(かいり)してはならない。現行の学習指導要領実施の折り返し時期を迎えた今年度、子どもたちに必要となる資質・能力を明確にし、教育の質の向上を目指すことを大切にしたい。そのため、重点教育目標と四つの経営の重点を設定した。また、教育の不易と流行のベストミックスを追求することを重視し、学校経営ランドデザインの日常的な活用と適時適切な更新を進めていきたい。」

3 経営の重点を踏まえた取組の具体

(1) 「サードプレイス」 経営の重点1「子ども一人一人にふさわしい学びの場の設定」

本校では、様々な事情により自分の教室に入りづらい子どもが複数いるものの、中・長期に渡るプランがないまま対応を進めてきた。

そこで、昨年12月、学校経営の仮出しの際、自分のペースで、心穏やかに学ぶことができる場を設置し、組織的・計画的に対応していく方針を示した。場の名称を家庭・在籍学級に次ぐ第3の場として「サードプレイス」とした。その後、全国の先進事例に学ぶ校内研修、運営委員会による全体計画の作成や教室配置の検討、不登校支援コーディネーターによる設置要綱の作成等を進め、4月から取組をスタートさせた。現在3人（内1人は体験入室）の子どもが活用しており、不登校支援コーディネーターを中心に専科指導や交換授業のシフトとリンクさせながら支援体制を構築している。



サードプレイス

時刻をずらして登校する子どもや行動面で著しい困難を示す子どもがいることから、チャット機能を活用した即時的な情報共有により、隙間のない生徒指導体制も整えている。登校日数や学校行事への参加機会が増え、他者とのつながりを担保できたことが大きな成果である。また、教職員にとっても子ども一人一人の背景に目を向け、多様な支援策を検討するなど、子ども観や指導観の転

換に結び付いている。一方、子ども理解支援シートの作成と更新、在籍学級への復帰計画、学びと生活のプログラムづくり、支援担当者と担任との情報交換等、今後の課題も明確になっており、次の一手を検討しているところである。

(2) 「授業改革」 経営の重点2「授業改革の推進と学級経営の充実」

本校は平成25年度から「学校力向上に関する総合実践事業（道教委）」の指定を受けてきた。

事業の趣旨や重点を踏まえ、今年度は、第2回地域協議会（9月）を見据え、教職員による主体的・自律的な授業改革を進めることを呼びかけてきた。具体的には①教職員の協働的な学びを促す観点から、同僚性を高めながらブラッシュアップを図るため、全学年の授業を公開する②学習指導要領が示す資質・能力を育成する観点から、学習のねらいを吟味し、指導と評価の一体化の充実を図る③学校を挙げて主体的・対話的で深い学びの実現を目指す観点から、学びの「必要感」と「達成感」を合言葉にすることを校内研修で確認した。



第2回 地域協議会(9月)

また、「各種事業の成果を横展開で共有する」という旭川市教委の方針を踏まえ、上川教育局及び指定地域各校の理解を得て、地域協議会当日は、学校力向上全体に関わる協議に加え①6本の授業にフォーカスした研究協議の設定②授業に特化した指導・助言をいただく機会の設定など日程の組み方を変更した。当日は67名の参加者があり、①本時のねらいに迫る有効な手立てと、働かせる見方・考え方の具体化②子どもによる主体的なICTの活用③一人一人の可能性を引き出す学習評価等について、学びを深めることできた。若手教員をはじめ、ICTを活用した研究授業に初めて挑戦したベテラン教員の自信を育み、全教職員の参画・協働意識を高めることに結び付いた。日常の授業を参観すると、子どもの主体的な学びの機会を保障する45分のタイムマネジメント意識が高まり、学習状況の異なる子ども一人一人への効果的な支援策が準備されるようになった。包括的な学校改善の中核をなす視点「学習指導・教育課程」を切り口にした取組により、学校経営に勢いを付けることができた。

(3) 「社会とつながる体験活動」 経営の重点3「学校課題の適切な把握と迅速な対応」

新型コロナウイルス感染症の影響等により、他者とのつながりが希薄となった本校児童の課題は「自ら問いを見付け、協働して解決する力」である。自立した学習者に育てるために欠かせない資質・能力である。そこで、本校では、教育活動の縮小や廃止等の整理を進める一方で、社会とつながる見学・体験活動や交流活動を積極的に教育課程に位置付けた。これらの活動は、直接本物に触れることにより、現実の世界や生活への興味・関心を高めることに結び付く。また、問題発見力の育成をはじめ、場に応じた挨拶や言葉遣い等のマナー、多様な他者と対話をして納得解を見出す共生の作法を身に付けさせることができる。学びの成果を日常の授業につなげ、自ら「問い」を立て、見方・考え方を存分に働かせながら、仲間と磨き合う子どもを育てていきたい。



アイヌ民族音楽会(11月)

<地域の人にとっても「やりがいがある」という見学・体験活動、交流活動>

- 学校模擬選挙（旭川市選管）
- 租税教室
- 水道教室
- 消防教室
- アイヌ民族音楽会
- 陶芸教室
- 施設見学（近文清掃工場、旭山動物園、旭川市博物館、商業施設）
- 見守り活動「あい運動」に感謝する会
- 食育教室（I 羅臼漁協、II 日本ハム）
- 読み聞かせ（地域ボランティア）
- 人権教育CAPあさひかわ
- 大阪・沖縄とのオンライン授業
- 私の未来プロジェクト（旭川市子育て支援）

4 おわりに

今後も、持続可能な社会の創り手として必要となる資質・能力を育成するため、校内外の教育力を結集・分担し、子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育に邁進したい。